

この夏、「新潟の漆器」展と題して、くらしの道具としての漆器を展示します。展示の中心となるのは漆器のお椀やお膳です。

冠婚葬祭などの行事や改まった食事の席では黒や赤の漆器が登場し、身近なところでも漆器はよく目にされます。また、一〇〇円ショップの食器コーナーにも、黒色や赤色に塗られたお椀やお盆が並んでいますし、レストランや食堂で和食を注文すると、漆器のお盆や汁椀、飯椀でふるまわれる場合が多いと思います。

しかし現在目にする漆器風の食膳具の多くは、合成樹脂の素体に合成塗料を塗布した合成漆器で、天然の漆と木を用いた手作りの漆器ではありません。ただ、合成漆器が広く使われていることは、かつて祭儀に使われ、あるいは一部の貴族の道具であった漆器が、くらしの道具として普及したことを物語っています。展示では、日用品の漆器として中世から用いられた柿渋を下地に用いた漆器をはじめ、古代から近世までの発掘された漆器や、江戸時代末から昭和に使われた漆器を展示し、どのような漆器が使われてきたのかを振り返ります。

の飲食器を中心に漆器の生産が盛んになりました。元治元（一八六四）年には塗り専門の職人である塗師屋の数は九十軒に上りました。技法の特色には黒や朱一色の塗りを施す花塗と、漆で多様な模様を作り出す変わり塗りがありました。

展覧会では、現代の塗師による、新潟の漆器の三種の塗りの工程を写真パネルで紹介いたします。

まず竹塗は、お膳や重箱、菓子器など様々な道具に使われた塗りです。竹塗といっても、実際の材料には竹を使わずに、竹のような風合を漆の塗りだけで表現する技法です。砥の粉と漆を練ったサビを塗りつけて竹特有の節をつくり、漆が程よく乾くのを見計らってマコモを蒔いて研ぎ、竹の風合をつくり出します。

錦塗は、変わり塗りの一つで、戦後は座卓などにも使われました。錦塗は、いくつもの色の漆を塗り重ねて漆の層を作り、研ぎ出して複雑な多色の模様を浮かび上がらせる技法です。黒漆を不規則に叩き塗って「目を立て」、盛り上げた黒漆の上に、黄・緑・朱色の漆を薄く塗り渡します。錫粉を蒔いて、再度黒漆を塗った上で、研ぎと漆塗りを繰り返すことで、多色の漆層を平らな模様としてつくり出します。

竹塗と錦塗は、いずれも研ぎ出し技法を用いたもので、これを専ら行う塗師を磨き師と呼びました。磨き師は、漆の塗り、乾燥、研ぎを重ね、塗りの厚味や乾き具合、砥ぎの具合を加減しながら、模様とツヤが最も見事になるように計算して作業します。これは時間がかかる仕事で、たとえば下地と中塗りに五回、彩漆の重ね塗りに五回、模様を研ぎ出すのに三回、最後にツヤを出す作業に六回漆を塗ると、漆を乾燥させるだけで一ヶ月以上かかります。このため、できるだけ複数の仕事を同一の工程になるように組み合わせ、効率的に仕事を進めます。

新潟の漆器において磨き師と並ぶ存在が花塗師です。花塗は塗りっぱなしとも呼ばれ、刷毛で塗りあげたそのまま仕上げになるため、集中力と高い技術が求められます。花塗には、発色とキメを高め、なおかつ縮みが出ないように漆の乾き加減を適切に調整する技量も重要になります。

塗師の漆器制作の技法と、その技法を用いて作られた新潟の漆器を、展覧会会場では是非ご覧ください。

（もり ゆきひと 学芸員）



花塗の作業



錦塗の作業



竹塗の箸

常設展示室から

白山神社大船絵馬（複製）

展示資料の中で最大のものは、この白山神社大船絵馬（複製）です。縦154cm、横324cmの画面は鮮やかな色彩で描かれ、展示室の中でもひととき目立つ存在です。

白山神社大船絵馬は、嘉永5(1852)年、水原の市島次郎吉が絵師井上文昌に描かせ、白山神社に奉納したものです。市島次郎吉が新潟湊からの御城米(幕府領の年貢米)の回漕を請け負っていたため、その無事を祈願し感謝するためのものだったと考えられています。この絵馬を白山神社に奉納するにあたり、市島は絵馬を車に載せ、盛装した数十人の芸妓に引かせて新潟町を練り歩き、白山神社まで運んだとされます。なんとも華やかな話です。

展示資料は新潟白山神社の拝殿に掲げられている実物を基に、これが製作された嘉永5年当時の色彩の再現を試みた復元複製です。この複製にあたっては実物の詳細な調査を行い、顔料や支持材の分析とあわせて、画題についても子細に確認しました。

金雲によって上下に分割された画面の下側は新潟湊から御城米を運び出す様子です。画面右下には白山神社、境内にあった町蔵が描かれています。舩は河口と沖とを行き来し、沖に停泊しているベザイ船に米俵を積み込んでいる様子が描かれています。

画面上の右側は、朝日が昇る江戸城と江戸城下、江戸湊の入口に位置していた佃島が描かれています。また、江戸湊の沖ではベサイ船が停泊し、舩に米俵を積み下ろしている様子が描かれています。



画面上の左側は大坂で、左上には大坂城とその城下、ベザイ船が停泊している大坂湊に、小高い丘の天保山が描かれています。

船に注目してみると、差配人請、村請、町請などの記載のある旗が立てられています。大船絵馬には、岩船の船が六艘、北蒲原の船が二艘、刈羽の船が五艘、頸城の船が三艘描かれています。これは、差配人である市島が持つ船のほかに、村、町が輸送を引き受けて使用した船があったことを物語っています。その理由は、廻米輸送量の増大に対応するためであったと考えられています。

大船絵馬は新潟湊の繁栄の様子を垣間見せてくれるだけでなく、その背景に廻米輸送のシステムがあったことをも示しています。

越後廻米輸送については、当館研究紀要第2号研究ノートにて「越後廻米輸送における地元請負の展開」として報告がありますのでご参照ください。

藍野 かおり(あいの かおり 学芸員)

おすすめの1冊

新潟の町 新かわらばん

本書は、町の移り変わりや風俗を見つめてきた著者が、新潟島で繰り広げられた歴史や事跡について、往時の写真を織り混ぜながら書き綴った一冊です。

著者の笹川勇吉氏は、明治四十三(一九一〇)年新潟市に生まれ、笹川餅屋の三代目として家業を担いながら、新潟郷土史研究会、新潟県民俗学会などに所属し、郷土史家としての顔も持ち合わせた人物です。本書は笹川氏が新潟日報発行の「かわらばん」に連載した記事を一冊の本にまとめたもので、著者自身のエピソードをからめつつ、町に点在する歴史の足跡を紹介しています。古写真がふんだんに掲載されていて、往時を知らない私にも当時の暮らしや文化が想像できます。

このほか、事跡を伝える石碑の写真も多く掲載されています。文や写真をたどりつづ、昔日に思いを馳せながら町を歩いてみると、見慣れた風景が違って見えてくるでしょう。

(渡邊 久美子 学芸員)



笹川勇吉著
1995年4月初版
考古堂書店